
美しさの極意(鈴木×樹里、死々若丸→幻海、幽助×蛭子)

ルーラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しさの極意（鈴木×樹里、死々若丸↓幻海、幽助×蛭子）

【Nコード】

N1571B

【作者名】

ルーラ

【あらすじ】

ストーカーに悩まされる樹里と、鈍い鈴木がメインです。他に死々若と幽助のエピソードもあります

それは、ある日曜日の朝の事。

「鈴木いゝ！いるかゝ！？」

まだ朝早いのに大声を上げて幽助が立っているのは、

陣・凍矢・鈴木・死々若が魔界統一トーナメント（第二回）終了後に、

人間界に興味を持った彼らがやって来て借りて住んでいるマンション。

正確にはその中の一室のドアの前。

しばらくして呼ばれた男がガチャツとドアを開けて顔を出す。

「ん？こんな朝早くによく来たな。どうしたのだ幽助？」

「よつ元気そうだな・・つてあれ？若はいねーの？」

いつもならば鈴木の肩にとまって一緒に顔を覗かせるはずの死々若が、

今日は肩にいなかった。

「うむ、奴は霊界に用があるといつて出かけている。それに陣と凍矢も留守だぞ。」

「そつか。んで、死々若は何でまた霊界に？」

幽助が首を傾げて言う。

死々若が、霊界に用があると聞いても思い当たる事が無かったからだ。

「魔界統一トーナメント（第二回）も一段楽したし、

幻海がいつ生まれ変わるのか調べたいらしい。」

「ばあさんの？何で？」

「暗黒武術会の時にあいつと幻海が戦つてな、その時に一目惚れしたのだ。」

・・お前はいなかったが。」

「へえゝ。」

まあ、ばーさんつえーし美人だしな……。あいつの好みはばーさんだったのか。」

「どうやらそうらしい。蔵馬の頼みを引き受けて幻海のもとで修行をしていたが、

その後魔界にずっと来ていたから幻海が死んだ事を知らなかったただろっ？」

「そっついやそーだったな。

こっち来た時それ聞いて、皆で慌てて墓参りしに行ったもんなん。」

幻海は第一回魔界統一トーナメントが終わってしばらくしてから、故人になってしまった。

鈴木たちが人間界に来たのはそれから随分たってからなので知らなかったのも無理は無かった。

幻海にかなりの恩を感じていた彼らは、

彼女が死んだのだと聞いてすぐ魔界にいた酎と鈴駒を呼び出して、すぐ墓参りに、そしてお礼を言いに行こうと言う話になったのだ。

「表には出さないが、

こちらに再び来た時初めてそれを聞いてかなりショックだったらしい。

俺もショックだったしな。

生まれ変わりなど調べるのは無理だと言って止めたんだが、

あの通り強情な奴だからどーしても自分で調べると言って聞かんだ。」

「へえ・・生まれ変わりか・・」

生まれ変わりがどのように行われるものなのか、

はつきりした事は霊界ですら分かっていない。

生まれ変わって来てもちゃんと若と結ばれるかすら分らないし、万が一結ばれたとしても

人間界で死んだ彼女ならまた人間に生まれ変わって来る可能性のほうが高い。

だよな、仙水？

まあ、おめーは魔族になりたかったから魔界で死んだんだが、
霊界にも行かず魔族にどうやって生まれ変わるんだ？

ちゃんと生まれ変わってんのかなあ・・・？

あ、もしかしておめーだけしか知らない横道でもあるとか？ありえ
そうだ・・・。

とにかく妖怪と人間。寿命の違いは免れない。

幻海ばーさんは恐ろしく強くてもやはり人間だった。

それで戸愚呂ともめたぐれーだし・・・生まれ変わりを待つ、か。

何となく自分の父、

雷禅と食脱医師の女とのエピソードを思い出してしんみりする幽助
であった。

「ところでどうした？そんな立ち話をしに来たのか？」

鈴木の声で元に戻る。

「そうそうおめーに作ってもらいたいものがあるんだ。」

腕をポンツと叩いて幽助が言う。どうやら当初の目的を思い出した
らしい。

「随分唐突だな、で？何だ？」

「警備マシーン・・・っつーか、防犯装置みたいなものって作れるか？」

「？誰かに警備をつけたいのか？作れん事も無いが・・・お前には必
要ないだろう？」

「いや、俺じゃなく・・・」

「では蛭子さんに？まあ、彼女はお前に勿体無いぐらい美しいから
な。

心配なのは良く分かるが・・・」

彼らは皆幽助の彼女蛭子を知っていて、

彼が蛭子にプロポーズをしてそれが実った事を聞いて大いに祝福し
ていた。

祝福しつつ野次を飛ばしていたのは桑原と酎だった気がする。

「いや、ちが・・・」

「だがそこは、お前が自分の力で守ってやらねば。」

それこそ美しい愛情と言うものだろう。」

「ちげーっつの！」

ゴンツとげんこつを鈴木の上に一発お見舞いする。

「何をする！」

鈴木が頭を軽く撫でながら言う。

「話を聞けつて。依頼人は連れて来てるんだ。」

「そっなのかな？誰だ？」

「おーい、・・・ほら、いいから来いよ！」

「し・・・失礼します！」

「ん？お前は・・・」

遠慮がちに幽助の横から顔を覗かせたのは一人の女。

いや、正確に言えば妖怪なのだが。

こつもりの羽のような耳。

つやつやとした鰻のようなしっぽ。

細身の身体。

緑色のストレートな長い髪に整った綺麗な顔。

ぱっちりした大きい瞳が愛らしい。

今は人間界で大活躍中の＜カルト＞のメンバーの一人、

元気なアイドルNO.1である樹里だった。

「こんにちは。」

「おお、大会の審判ではないか！！」

「はい、樹里です。」

「一体どうしたのだ？まあ二人ともとりあえず中に入ってくれ。」

鈴木が二人を部屋に案内する。

「で？どうしたんだ？」

三人でテーブルを囲むようにして座る。

「実はよー、こいつストーカーされてんだ。」

「ストーカー？」

いきなり用件に入る幽助。それに対し初めて聞く言葉に鈴木は首を傾げる。

「簡単に説明するとだな、惚れた奴を自分のものにするために脅迫したり、

拳句の果てには殺したりする歪んだ変態ヤローに付きまとわれる事だ。

どう思う？お前。」

「なるほど、それは災難だ。」

「人事じゃないですよ！毎日のように変な手紙や電話まで来るんです。」

私のその日の事とかも全部知って・・・

しかも今住んでるマンションの部屋を荒らされてる形跡もあるし、恐くて仕方ないんです。」

それを聞いて鈴木が顔をしかめた。

「女性が嫌がる事をするとは・・・美しくない・・・実に美しくない・・・」

「それだけかよ。」

と、呟く鈴木に突っ込む幽助。

「ん？だが、それだけなら樹里に付きまとう奴をお前が直接倒せばいいじゃないか。

専門だろう？」

「魔界でなら俺がぶっ倒せば済むんだけど、樹里に付きまどってる奴は人間なんだ。

人間界じゃ人間殺したら犯罪になっちまう。

煙鬼のオッサンの法律でも言ってたろ？」

魔界統一トーナメントが終わってから三年後。

第二回目に開催されたトーナメントの優勝者も煙鬼であり、

彼の体制はそのまま受け継がれている。

「人間界に迷惑かけるな・・・か。確かに言っていた。だが何故人間なんだ？」

「ああ、おめー知らなかったっけか？こいつら人間界でアイドル活動してんだよ。」

もうかなり人気もなんだぜ。なあ？」

「あはは、まだまだですよ。ちなみに瑠架と小兎も一緒です。」

「そうだったのか・・素晴らしい事だ。」

鈴木の言葉を聞いて、樹里が照れたように笑う。

ほんのかすかに頬が赤く染まっていた。

「それに彼女達も一緒なのか・・随分人間と妖怪は親しくなったんだな。」

だがやはりそう言う弊害もあるのだな。警察とやらはどうなんだ？」

「それがよ、他の国じゃ結構対策が作られてるらしいんだけど、

この国じゃまだまだで、身の危険が迫ってもよほどの証拠がねーと動けねえ。

それに樹里は妖怪だろ？」

いくら人間界に馴染んでもこっちじゃ存在が認められてねーし、詳しく身体検査とかで調べられるとまじーんだ。」

「うむ、なるほど。」

「けどこのままじゃ樹里に何が起こるかわからねえだろ？」

証拠さえあればそいつは逮捕される。だからお前に・・。」

「分かった、そういう事なら作ろう。証拠が取れるようなものを作ればいいんだな？」

「ん〜できりゃあ監視カメラみたいに映像に記録出来るようなもんがいいかもな。」

「そうか。だが他の二人には作ってやらなくていいのか？一応、用心のために。」

「あゝあの二人は大丈夫だ、もう誰にも負けねえボディガードが・・」

「そうなのか、ならお前も雇えばよいではないか。」

「あほ、陣と凍矢だ。」

「そうだった！！すまんすまん、つい忘れていた。二人とも、やけに帰って来ない日が続くと思っていたら彼女達の所に行ってるのか。」

鈴木が妙に納得顔で言う。

「そー言う事。」

「では早速とりかかろう、時間は大丈夫なのか？」

鈴木の言葉に樹里はにっこりと笑って答える。

「はい、今日はオフですから。」

二時間後、鈴木は自分専用の部屋、いわゆる<研究室>から出て来た。

「できたぞ!!」

自信満々に机に置かれたのは霊界テレビにも似ているが、更に軽くて薄くて便利なノートパソコンのようなもの・・

と言った方が正しいだろうか。
ただし側面に電球やセンサーが仕込まれており電話機等もついている。

「おお！サンキュー!!なんかすっぱー機械だな。」

「わぁ・・すごい・・。」

じろじろと物珍しそうに機械を見る幽助。

そして樹里も感心したように機械と鈴木を見つめる。

「ふっ天才だからな。」

そうそう人間界のものにも通用するよう作ったから大丈夫だと思うぞ。

だが、これらを実際取り付ける為にお前のマンションに行かなくてはならんが・・・。」

「もちろんOKです!!」

「そうか、ならすぐ行こう。」

ところで幽助、お前ストーカーとやらの性癖などはよく知っているのか？」

「んゝそうだな、話に聞いているだけで詳しくねえ・・・。
なら、蔵馬も呼ぶか。先に行つててくれ。」

「頼むぞ。では樹里、案内してくれ。」

「はい！」

二人が樹里のマンションに向かっていている間、幽助から樹里の携帯に電話があり、

蔵馬から盗聴器を見つけたとの指示を受けた。

そして樹里のマンションにて鈴木は自分の作った道具を使い、盗聴器を五つも見つけ出していた。

壊すと言われていたので箱につめておき、

それ以上はもう反応が無いので話が自由に出来る事を樹里に伝えた。

「中々綺麗なマンションだな。」

「そうですね？」

鈴木が部屋を見回しながら言う。樹里のマンションは8階建ての高級マンションで、

部屋は最上階。ベランダから見える景色はとても綺麗である。

棟は違うのだが、小兎と瑠架も同じマンションである。

その時、

ピンポン♪とベルが鳴る。

入ってきたのは幽助と蔵馬。

「おお蔵馬、久しぶりだな。」

「わざわざご苦労様です、鈴木。ところで見つかりました？」

「お前の言った通りだった。これだ、五つもあったぞ。」

鈴木が箱に詰めた盗聴器を蔵馬に見せる。

「そうですね…。大変でしたね、樹里。」

「はあ、全然気付きませんでした。いつの間に…。」

「そう言うものみたいです。所で相談なんですが…。」

蔵馬は皆を集めて何やら話し始めた。

しばらくして相談し終わった後、蔵馬が言う。

「どうせなら一気に片をつけたいでしょう？少々危険ですが…耐

えれますか？」

樹里の方を向いて確認する蔵馬。

「はい！頑張ります！！」

蔵馬の問いかけに向かって樹里はようやくこの生活から解放されるのか、

と元気良く返事をした。次の瞬間樹里は盗聴器に向かって

「このバカ！！あんななんか・・・（中略）・・・なのよ！！」

盗聴器に向かってたまった不満をぶちまける樹里。

言い終わった後とふうつと樹里がすっきりしたような顔をした。

「第一段階はこんなもんでよかったですか？」

につこり笑って男三人の方を向く。

その時の三人は今見た光景の物凄さに固まっていたのでした。

鈴木が装置をセツトしている間、

幽助と蔵馬は屋上で見張るといって彼と樹里を二人きりにしていた。

（これは幽助の差し金なのであるが）

鈴木の後で彼が装置を取り付けていく様子を樹里は大人しく見ていた。

「しかし・・・お前もよくあそこまで言ったな。相手は変態だろう？危険ではないか。」

鈴木が背後にいる樹里に向かって話しかける。

手を忙しく動かしながら言う鈴木の言葉を受けて樹里は笑う。

「だって相手を刺激した方がその分だけやってくる可能性高いですし、

手っ取り早くていいじゃないですかあゝ。」

「はは、大した奴だ。」

「やられっぱなしで待ってるなんて嫌なだけです！

私って体当たりが合ってるんですよ。」

一人で戦うのには慣れてますし、今回は鈴木さんが・・・

あついえ、幽助さんたちも協力してくれますし。」

「そうか、さすがはあの大会の審判をやっているだけあつて強いな。さてもう終わった・・・ぞ・・・。」

言いかけて振り向くと樹里はすぐ側のソファーに座っていて、

鈴木は視線に気付かないのか少し震えて不安そうな表情をしていた。実際彼らが来てくれるのだとしても、

そいつが来るまでは一人でいないといけないのだ。

それが、とても恐かった。

気丈な彼女の初めて見せる不安そうな顔を見て、鈴木は目を細めた。いくら強がっていてもやはり不安なのだろうな・・・。

「確かに妖怪であるお前たちが新しい世界で、

しかも人目につく仕事をやっていくのにはその方がいいんだろうな。だが、お前みたいに強い奴こそ、

たまには甘えることも覚えた方がいいんじゃないか？」

鈴木が隣に座ると樹里がはっとして、また普段の明るい表情になる。

「甘えですか？」

「ああ、気を張り詰めてばかりいると疲れるぞ。」

見事に表情の変わった樹里を見て鈴木は内心感嘆する。

こう言う奴はいくら辛くても、決してそんな所を見せないのだろう。

・・・美しい。

などと考えなら。

鈴木の言葉は予想以上に樹里の心に温かく響いた。

そして彼女の中に言葉が浮かぶ。

しかし、その言葉を実際口に出すとなると顔が熱くなっていく。

「・・・なら私ず、鈴木さんに・・・。」

甘えちゃおっかな〜と冗談めいて言おうとした矢先、

「そうだ！」

と突然鈴木が大声を上げた。

「え？」

目をぱちくりとさせる樹里。まだ全部言い終わって無いのに・・・。

「幽助たちの所に行つてテストしてみなくては！」

「あ……。」

樹里はガクツと前のめりになる。

かなり勇気を出して言おうとしたところに見当違いの事を言われて、激しい疲労感を感じた。

「ん？どうしたのだ？これから本番だぞ、頑張れよ。」

「あ……。はい！！頼りにしてます！」

彼がベランダから屋上に飛び上がっていくのを見送つて呟く。

「体当たりが合つてるのに……。どーして肝心な所で……」

ため息をついて肩を落とす樹里でありました。

そして夕焼けが消え、あたりが暗くなってきた頃。

玄関の扉が開く音がして、誰かががずかずかと入つて来る気配がした。

彼らが来てくれるのが分かっているとと言うものの身がすくむ樹里。

ついに男が樹里のいる居間へ入つて来た。

「樹里……。やっといたね……。」

「だ……。誰です……。か？」

「君を助けに来たんだ。」

男の目は異様な光を帯びており、更に目は血走っている。

その手に握られているものを見てゾツとして樹里は叫んだ。

「な、な何言つてるのよ！手紙とか全部あなたの仕業でしょう！？もう構わないで……！」

「テレビを見てはつきり感じたんだ、君と僕は結ばれる運命だつて。」

焦つてベランダを見ても彼らはまだ助けに来ない。

「樹里……」

男がナイフをかざし、近づいてくるのでじりじりと部屋の隅に追い詰められる。

幽助さんに蔵馬さん！それに鈴木さ〜ん！？どこ行つたのよ〜！！！！

「しっかしよあ、よくこんな事しようなんて思うぜ。なあ？」

樹里の部屋に男が侵入した頃。

三人は樹里の屋上にてストーカーについて語り合っていた。

鈴木の作った特殊な監視カメラを見つつ、

樹里の部屋に仕掛けられていた盗聴器にも視線を送って幽助が呆れたように言う。

「そうですね、人間の精神は複雑ですから。これも愛情表現の一種ですよ。」

「けっ俺は元人間だからあんま言えねーけど、少なくともこんな愛情表現は間違ってるぜ？」

「俺もそう思います。」

「ううむ・・・」

「ん？何考え込んでんだ？」

「いや、ストーカーと言うものについて考えていたところだ。」

鈴木の頭に浮かんでくるのは、

強いと見えた樹里がほんの少しの間見せた不安にかられた表情だったのだが。

慌てて樹里の顔を振り払った時センサーが反応し、ポウツと警告ランプがついた。

「おっそのストーカーが来たみたいだぞ。」

幽助がテレビに視線を送ると

画面には男がナイフを持って樹里の部屋に入って来るのが映った。

「ほほう・・・こいつがそのストーカーか。」

鈴木が画面を覗き込む。

人の姿をしているように見えるが、実物はよほど醜い豚に違いない。

「もっと近くで拝見して来よう。かまわないだろうか？蔵馬。」

鈴木の発言を聞いて幽助と蔵馬は顔を見合わせた。

本当は、鈴木があまり興味を示していないようだから

自分たちが行こうかと思っていたのだが。

「もちろんです。ただしああ言う連中は攻撃してくるのが必至ですから、

反撃する気になってもあまり怪我をさせないようにして下さいね。」

「うむ、分かっている。」

蔵馬の忠告に頷くと、

鈴木がマンシヨンの屋上から樹里の部屋につながっているベランダに軽々と飛び降りた。

「昼間の男達は誰だ？君は騙されているんだよ。他の男のものになる前に・・・」

こいつおかしい・・・すごく変だ！！

「やだ！！近寄らないで！！」

「失礼するぞ。」

樹里が悲鳴をあげたのと同時に別の声が重なって。

え？

と樹里と男が不思議そうに声がした方を向くと、ベランダから鈴木が入って来た。

「！っ・・・何だてめえ！！」

場面にそぐわない能天気な声にストーカー本人もかなり動揺している。

一方樹里は、意外な人物の登場に一瞬呆けていたのだが。

「すっ・・・」

嬉しさのあまり満足に名前を呼ぶことすらせず、彼の首に両腕を回して抱きつく。

来てくれた。

それも彼本人が来てくれた！

「わっ樹里！？」

「鈴木さん！！」

突然抱きつかれて鈴木も困惑する。

「一応聞くが・・・怪我は無いか？」

「平気でゝすっ！」

樹里はそう言いながら、どさくさに紛れて更に強くしがみつく。

「ふむ、良かった。しかし・・・」

鈴木は離れようとしないうちに樹里を軽々とぶら下げたまま、改めてその男をまじまじと見る。

「な、何だやんのか！？やるならやるぞ！！」

突然の侵入者に一瞬呆けていたストーカーだったが、

樹里が抱きついて行った男に対し嫉妬と殺意を交錯させる。

しかしいくらすこんでみてもその男は不思議そうに自分を見ているだけで、

ナイフを持った自分に怯える様子も無い。

「こいつがストーカーとか言う奴なのか？樹里。」

どんなに醜い豚なのかと思っていたんだが・・・普通の人間ではないか。」

監視カメラに写っていたのは確かに人間らしき男だった。

自分の想像と違って人の姿をしていたのに驚いたが、

実は人間の姿は仮の姿なのかもしれないと思っていた。

だがどう見ても人間だ。

「！何ふざけた事ぬかしやがる！その前に貴様！僕の樹里から離れろ！！」

どちらかと言えば樹里から抱きついていったのだが。

「ふん、離れるのは・・・」

鈴木が樹里をそつと下ろし、キッと男を睨み付ける。

「貴様だ！この大ばか者がああ！！！」

「え？あ・・・」

突然自分の視野から金髪の男が消えたので慌てて辺りを見回す。そして首の後ろに何か衝撃を感じた瞬間、意識が遠くなった。

「おいおい鈴木、殺すなよ？」

やはり鈴木同様能天気な声をさせて幽助がベランダから入ってきて、それに続いて蔵馬が部屋に入ってきた。

「幽助さん、蔵馬さん。」

「ふん、幽助。俺をなんだと思っている？力の加減ぐらい出来る。ちょろろと指先が当たっただけだ。」

「ま、確かにそうなんだけどな。」

腕を組み、うんうんと頷いている鈴木を見ながら笑いを堪えた表情で幽助も言う。

S級妖怪である鈴木が

どれほど力を抑えているか知らないこいつは幸せだなと思いながら。「これくらいは自業自得ですよ。」

鈴木のお陰で証拠も取れましたし、さっさと警察に突き出しましよう。」

「はいっ。皆さんありがとうございます!!」

三人に向かって樹里はぺこりとお辞儀をした。

無事に犯人を警察に引き渡して騒ぎが収まると蔵馬は自宅に帰ってしまい、

幽助もどこやらに用が有るのだと行ってしまった。

とりあえず御礼をしたいのだからって鈴木だけは引き止めたのだが。

「あ、あの・・・」

「何だ？」

「鈴木さんはすごいですね、あんな装置作っちゃうなんて。」

「いや、昔から物を作るのが好きだったし役に立ってよかった。

まあ、役に立たないものは作らないがな。」

「ふふっ・・・」

彼の自信満々と言う態度を見て、樹里がくすくすと笑う。

「ところで鈴木さんは綺麗なものが好きですよ？女性に対してもそうですか？」

樹里は前々から気になっていた事を思い出した。

暗黒武術会の時の様な異様な雰囲気、彼はもう宿してはいないけれど。

「ああ。」

鈴木はあっさり頷いた後、不思議そうに樹里を見る。

「突然どうしたのだ？前ほどこだわってもないが。」

その視線を感じて樹里は顔が熱くなるのが分かった。

「あ、あのー鈴木さんの発明品で・・綺麗になる薬とかありません？」

彼が美しさにこだわる男だという事は十分承知していた。

だから、もっと綺麗になって振り向かせたい。

たとえ薬の力を使っても。

「あるにはあるが・・。」

「じゃ、それ下さい！」

「それは駄目だ。」

「え？」

鈴木が首を横に振り、きつぱりと言い放つのを見て樹里が首を傾げた。

「お前は今のままで十分美しい。俺はもともと美しいものをいじる気はないぞ・・？」

鈴木が更に不思議そうに首を傾げる。

自分が持っているものをどうして望む必要があるのか分からないからだ。

「あ・・あれ・・その・・。」
変なの。

何でこんなに嬉しいんだろ。

涙まで出てきちゃったぞ？

すっかりしなくちゃ、私。

「な！？何故泣くのだ！」

「ごめんなさい・・。」

言いながら慌てて出てきた涙を拭く。

「それでいい。ではお邪魔した、そろそろ帰る事にする。」

「え・・・？もう帰っちゃうんですか？」

「ああ。用は済んだしな。」

その言葉を聞いて、淋しくて胸が痛んだ。

もうつ瑠架や小兎は想いが叶って順調なのに！

鈴木は樹里の質問に対しまた頷いていたが、

ふと何かに気付いたように樹里を見た。

「どうした？沈んだ顔をしているが・・・。」

「いえ、ただ・・・」

鈍い。気付いてもらえてないな。

でも言っちゃえあたし、こんな事でもない限り一生チャンス無い気がする。

「ただ・・・」

「ん？」

「もう鈴木さんに会えなくなっちゃうなって思うと自然に涙が・・・。」

「何故だ？俺たちが住んでいるマンションも分かっただろう？」

いつでも会えるだろうが。」

鈴木があっけらかんと言いつつ。

「え？」

その言葉を聞いて拍子抜けする樹里。

「お前のマンションからは少し遠いかな。」

かといって女性一人のマンションに俺から訪ねていくのもどうかと・・・。」

「わ、私は気にしませんから！！」

「そうか？なら忙しい時に呼んでくれ、都合が許せば行く。」

あ、そうそうさっきは偉そうに来てくれなどと言ったが

俺達のところに来ては今俺と若ぐらいしかいないからつまらないかもしれんぞ。

いいのか？」

「そんな！嬉しい・・」

もしかしたら聞き間違いかもしれないと思い、慌ててもう一度聞く。

「本当に、本当にまた行つていいんですか？」

「ん？もちろんだ、いつでも来てくれ。」

お前の美しい顔を見ていると和むからな。それじゃ。」

「はい！！」

その頃死々若は、

閻魔大王の城の門を出た後近くにあつた石に随分と長い間腰を下ろしていた。

「ん？」

誰かが近づいてくる気配がしてそちらを向く。

霊界へ通じる道はよく雲が通る。

そこに影が写つたかと思うとだんだんその影の輪郭は大きくなり、やがて完全に姿を現した。

「よつ若。」

そこから現れたのは幽助だった。

「幽助？どうしたのだ？」

「いや、ちよつくら霊界がなつかしくなつてな。」

幽助が辺りを見回しながら言う。

「そうか・・。」

「・・。」

「・・。」

しばらく沈黙が続く。

幽助は死々若に視線を戻す。

死々若の様子からして、

自分の望む答えを聞けなかったのだと言う事は痛いほど良く分かった。

それでも聞くしかない。

「・・・なあ、若・・・どうだった？聞いたんだろ？」

「分からないのだと言われた。・・・詳しい事は何もな。」

何を、とも聞かず死々若は表情を変えずに言う。

「そっか・・・。」

分かりきった事であつたが、自分も一瞬期待していただけに何となく声が沈む幽助。

そんな彼を死々若が不思議そうに見た。

「お前、わざわざその為に？」

自分の質問を聞いて幽助は曖昧な笑みを浮かべた。

「ああ、実は心配になつてよ。」

「・・・感謝する。」

若が幽助から視線をそらし、ぶっきらぼうに言い放つ。

「けっ素直に礼言うなんて何だかおめーらしくねーなあ。」

「ふんっ」

「・・・。」

「・・・。」

またしても沈黙が続く。

「・・・なあ、俺が妖怪の可愛い子達、紹介しようか？」

先に沈黙を破つたのは幽助。

死々若はその言葉を聞いて幽助のほうに視線を戻し、怪訝そうに首を傾げる。

「何故だ？」

「いや、彼女欲しいんじゃないかって思つて。」

「要らん。」

「お前色男だし、その気になれば選り取りみどりだぜ？」

「何と言つても要らん。」

その断固とした口調に思わず幽助はため息をついた。

そして宥める様な口調になる。

「あのな、ばーさんが本当に生まれ変われるか分からないんだろ？」

「だが、可能性が無いわけではない。」

「うまく結ばれるかも分からねえ。結ばれなかったらどうすんだ？」

「それならば仕方ない。いてくれればそれでいい、それ以上は望まん。」

元々おれのものに出来るような女じゃなかったからな。

と付け加え、死々若は平然として答えた。

黄泉がいればこいつ・妖気にも体温にも全く変化が無い、まさか、本気か！？

と思っただろう。

「んじゃ、生まれ変わりもあるとして・・・」

幾分疲れた口調になる幽助。

「おめーとも結ばれたとしてだな、ばーさんが運良く妖怪に生まれ変わりにゃいい。」

でもよ、人間に生まれ変わってたらどうすんだ？」

「それが何だと言うのだ？お前は雪村とうまくやっているではないか。」

それに同じ人間と言うなら桑原達とも。お前に出来て

俺に出来ないはずなからう？」

「ちげーよ。人間なんか、すぐ年寄りになって死んじまうだろ。最近気付いた事。」

それで考えないようにしていたのだが、どうしても心の中にしこりとなつて残る事。

置いていかれるんだぜ？どんなにずっと一緒にいたくてもな・・・
蛭子や桑原は言葉にこそ出さないが、頭のいいあいつらのこと、
寿命の違いと言う問題に俺が能天気気付かないでいた頃から
それぐらい分かっていただろう。

「確かにな。だが人間を本当に愛すると言う事は、

そう言う事を受け入れたうえでするものではないのか？

そうなつたらまた生まれ変わりを待てばいい。どうせ時間だけなら
たっぷりある。」

「うつそりや・まーな。」

相変わらずあつさりと言い切る彼の言葉に思わず口ごもる。

「けどおめーは本当にそんでいいのか？」

言い方悪いけど、いつになるか分からないのを待ってるのって時間を無駄にしてるだけじゃねーの？

あいつらは俺が人間だったときからいてくれた。

おめーのようにいつ会えるか、

おまけにいついなくなるのかが分からない訳じゃねえ。

だから俺は今すっげー幸せでいられるんだけどよ・・・。」

幽助はあからさまに顔をしかめて言い放った。死々若はそんな幽助を黙って見る。

半分やけになっているように見えるのは気のせいだろうか？

「俺の場合はお前のように幸せだと言えるのが今じゃないただ、ただ時間がかかるだけだ。」

お前のようになれるかもしれないと期待することが無駄なのか？「なににせよ、幸せだと言える幽助に対し苛立った口調で死々若が言う。

「ああ。いい結果になるしろ、悪い結果になるにしろ、

何かでその期待に決着が着けばいいけど、

おめーの場合はそう言う決着があるのかさえ分からねーからな。

他に相手を見つけろって。」

期待して待つて、

結局めぐり合えず死んじまった俺の親父のようになったらどうすんだ？

親父が死んだのは人間を食うのを止めたせいだけだ。

だがおめーは人間食う必要ねえし、

そう言う飢餓で死ぬ事はまずありえねえ。

同時に事故や病気、

怪我で死ぬなど自分達の強い生命力の事を考えれば無いに等しい。

限らない寿命の中で、このままあるかも分からない生まれ変わりを

信じて行くのなら、

決着と言うものがあるのかさえ疑わしい。

それでも彼が心を変え、

他の相手を・・・（出来れば妖怪を）見つければそんな心配はしなくて済む。

「ならば考えてみる。・・・お前のように無駄なのだと納得するまで考える。」

「おいおい、言い方が変わっただけでどっちにしろ同じ事じゃねーか。」

死々若は頑固だ。

自分が決めたことをそう簡単に覆すような奴ではない。

死々若がキツと目つきをきつくして、まっ直ぐ幽助の目を見る。

お互いしばらくにらみ合っていたが、幽助がふいに表情を緩めた。

頭を横にふりながら更に笑いを堪えた顔をして、ゆっくりと言った。

「・・・悪かった、無駄じゃねえよ。」

俺もこれから先、

あいつらがいなくなったら今のおめーのようになるかしんねー。」

長い長い時間、

あるかも分からない生まれ変わりをただただ信じて待つだけの生活に。

「その可能性はあるな。」

「だろ？ まいっちまう。」

「自分を棚に上げて話しているからだ。」

「はは、まったくだ。おめーと話してて気付いたぜ。」

けどおめーの答え聞いてたおかげでこっちも自信ついた。

見習わなくちゃいけねーな、サンキュー。」

冗談めいて言う幽助を見て死々若は俯いた。

「だが俺は、今のお前が羨ましい。実を言うと・・・少し恐いのだ。」

本当に、そんな時が来るのだろうか。

幽助が近づいてきて肩に手を乗せられる感触がして、見上げると笑

いかけてきた。

「帰ろっぜ。やる事はやったんだし、俺はとことんおめーに付き合っ
ぜ。」

これからもずっとな。」

わりい、オレの方こそばーさんいなくなったのに悲しいの隠して、
ちゃんと頑張ってるおめーが羨ましいんだよ。

オレはあいつら死んだらどうなるかわかんねーし。

けど本当は・・・こんな幸せを知らないおめーの方がよっぽど辛い
んだよな。

ごめんな。

「その言い方気色悪いぞ・・・。」

「しばらくは男の友情で我慢しろって。もちろん俺だけじゃねえぞ、
忘れんなよ。」

「・・・ああ。」

「気が変わったらすぐ言えよ？」

「・・・。」

死々若は幽助のその言葉を聞いて顔をしかめた後、彼から顔をそら
して思った。

出来れば幽助がそんな生活を送らないですむように。

何か、何かそうならないようなきっかけがあればいいと。

ふと、幽助も今の自分と同じ気持ちであんな事を言ったのだと気付
く。

・・・それが嬉しかった。

二人がマンションに着いたのは日が昇る直前だった。

鈴木の家へ樹里と出掛けてから丸一日経ったことになる。

そしてその日の夕方。

「ずっずき！若！元気だったべか？・・・あれ？」

陣が元気一杯に扉を開けて入ってきて・・・立ち止まった。

「陣？前が見えないぞ、どうし・・・ん？」

固まってしまった陣の後ろから凍矢が前をのぞくと同じようにして立ち止まる。

「おお、陣に凍矢。瑠架と小兎は元気だったか？」

鈴木が手を挙げていつも通りに挨拶する。

「よう、久し振りだな。」

彼らの反対側には手を挙げて挨拶する幽助がいて。

鈴木肩にはいつも通り死々若がとまっていて。その隣には・・・？

「こんにちは陣さん、凍矢さん。お邪魔してまあ～す！樹里で～す！」

「「え！？」」

陣と凍矢の二人は訳が分からず目を丸くする。

幽助はその様子を見てニヤニヤと笑っているが。

「あら？樹里・・・。」

固まった二人が元に戻り、後ろから瑠架が出てくるとやはり瑠架も目を丸くした。

「瑠架？どうしたの？」

その後ろから小兎も出てくる。

「へ？瑠架に小兎？どーしているの～？」

「それはこっちの台詞よ。あなた、用事があるから先に帰るって言うてたじゃ・・・。」

「これが用事で～すっ遊びに来ちゃった！」

明るく樹里が答えるのを見て、

言いかけた瑠架と樹里を見たばかりの小兎は不思議そうに顔を見合わせる。

その時、

ピンポン♪

と言う音がした。

インターフォンの近くにいた陣が出ると蛍子だった。

「こんばんは、あの幽助がどこに行ったか知ってますか？」

「ああ、ここにいろべ。とーや扉開けてやって、蛍子ちゃんだ。」
頷いて凍矢が彼女を入れる。

「ゲッ」

陣の言葉を聞いて幽助が呻く。

そーいや霊界に行くって言った後何の連絡もしてねー！！

「あ、こんにちは凍矢さん。幽助いるって本当ですか？」

「ああ、久し振りだな。こっちだぞ。」

「幽助！！」

自分を見た蛍子が怒りのオーラを発しながらやって来る。

「もうっ霊界行くて言った後何も連絡来ないから心配したのよ！
もしかしたらここに来たら何か手がかり聞けるかなって

思ったから来たの。あ・・・」

「すまねえ！！・・・っておい！大丈夫か！？」

蛍子が少しふらついたので、慌てて幽助が支える。

「大丈夫・・・」

「うーん・・・それにしても・・・」

「な、何よ！」

「おめー少し太ったんじゃないか？」

幽助が支えた方の手で軽々と蛍子の体を少し持ち上げながら言う。

蛍子が心の中でやはり、と呟く。

痛いところを・・・さすがは幽助。

嫌になっちゃうな、ダイエットしないとって思ってるんだけど。

「うるさいわね！急に色々食べたくなったりしちゃうんだから仕方ないでしょ！」

下ろされた後幽助に向かって怒る。

「わ！」

「・・・蛍子さん、きつと座った方がいいですわ。・・・身体に障った
ら大変ですから。」

瑠架が何かを感じたように言う。

「え？瑠架さん？」

瑠架の言葉に螢子もきよんとする。

そして。

この日はそれから蔵馬さんに桑原さんに雪菜ちゃん、酎さんと、彼に引つ張られた棗さん、

鈴駒くんに流石ちゃんまで呼び出されて、皆で飲めや歌えの大騒ぎでした。

もちろん螢子さんがお酒を飲むことはなかったけれど。

これからまだまだ楽しいことが起こりそうです。（B Y、樹里）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1571b/>

美しさの極意(鈴木×樹里、死々若丸→幻海、幽助×蛭子)

2010年10月15日20時14分発行